

インターネットにおける 日本語慣用表現を中心とした誤用の調査

望月 源, 中嶋 一樹

東京外国語大学 外国語学部

e-mail:{motizuki, nakajima.kazuki.rrb}@tufs.ac.jp

1 はじめに

近年、個人がインターネット上に自分のホームページを持つことが珍しくなった。Blog や Weblog などと呼ばれる個人で管理できる日記的な Web サイトが登場したこともあり、身近なできごとから国際情勢に至るまで多岐にわたる話題について意見が述べられていることも多い。おそらく、現代の日本では、かつてないほど多くの人々が「読者」を意識した文章を日常的に書いたり読んだりしていると言って良い状況にある。

ある状況や考え方などを効率良く表す方法として、慣用句や慣用的な言い回しの使用がある。慣用句とは「二語以上が結合し、その全体が特別の意味を表す句」(広辞苑)であり、読み手との共通理解の成り立つ道具として用いられる。適切に用いれば便利で効果的であるので、個人の Web ページ上でも、慣用句や慣用的な言い回し(以下まとめて「慣用的表現」と呼ぶ)が用いられる場合も多いが、同時に「誤用」を目にする機会も増加した。こうした影響もあってか、最近、日本語の慣用的表現の使い方や誤用に関する書籍も多く出版されている [2, 3, 4, 6]。

本研究では、慣用的表現の誤用に関する調査を行なう。ただし、本稿の目的は、どのような記述が「誤用」で、何が正しい「正用」であるか、という慣用的表現の使い方に関する報告ではなく、誤用はなぜ起こるのかという点に焦点をあてる。そのため、実際に見られる慣用的表現の誤用例をリストアップし、その誤りの個所と、誤りに共通してみられる性質を分類した上で分析し、どのような性質の誤用が、どのような理由で起こるのかについて考察する。

2 誤用例の収集と分類

調査の手続きは次のとおりである。まず、慣用的表現の誤用に関する書籍やインターネット上のページを参考に調査対象となる慣用的表現とその誤用のリストを収集する。次に、正用と誤用の差を調べ、誤用部分の品詞などから収集したリストを分類する。次に、正用と誤用の相違個所に見られる音や意味の類似性などから誤りの性質を分類する。それぞれの分類に対する分布を示した上で、3 節で個別に考察を行なう。

2.1 誤用の収集

慣用的表現の誤用としては、少なくとも次の 2 つを考えることができるが、本研究では後者を対象とする。

- 文字レベルでの間違いはないが、慣用的表現の意味を間違えている誤用。
例えば、気づかいしなくてよいという意味の「気が置けない」を、気を許せない、油断できないとの意味で使用した場合などが該当する。このタイプの誤用は表層では判断できず、文脈によって誤用であるか否かを判断しなければならないため、本研究では扱わない。
- 慣用的表現の意味は間違っていないが、文字レベルでの間違いのある誤用。
これは、用法や場面は間違っていないが、文字レベルでの間違いのある誤用であり、正用と誤用の間に表層的な相違が存在する。本研究ではこちらを調査対象とする。

調査対象は次の手順で収集した。まず、慣用的表現に関する書籍やインターネット上のページを参考に 378 組の正誤ペアを収集した。その中から、あまり一般的でないと思われるものを除いて 196 組に絞り、更に、Google APIs[1] を用いて検索し、次の条件のいずれかに合うものだけを最終的な調査対象とした。

- 正用と誤用の検索結果の合計が 500 件を超えている。ただし、誤用が 10 件以上で 0.1%(1000 件に 1 件の割合) 以上を占めているもの。
- 誤用の方が、正用の件数を上まわっている。ただし、誤用が 10 件以上あるもの。
- 上記の基準に満たない場合でも、興味深い事例と判断されるもの。

最終的に、128 組を分析の対象として定めた。なお、google APIs での 128 組の検索結果は、正用が延べ 930737(平均 7271) 件に対し、誤用としては延べ 128764(平均 1006) 件のホームページがヒットした¹。

¹ 単純な検索のヒット件数であり、慣用的表現として記述されたわけではないものも含まれる可能性がある。目安と考えて欲しい。

2.2 誤りの個所による分類

128組の正用と誤用で表記を比較し、異なり部分の品詞等の違いにより以下の4つグループを設定した。

- 名詞型：正用中の名詞が誤用では別の名詞に置き換えられているもの。例：正用「首を傾げる」(17450件) / 誤用「頭を傾げる」(970件)。128組中64組がこのタイプに分類された。
- 述語型：正用中の述語が誤用では別の述語に置き換えられているもの。例：正用「的を射る」(1864件) / 誤用「的を得る」(1026件)。128組中38組がこのタイプに分類された。
- 助詞型：正用中の助詞が誤用では別の助詞に置き換えられているもの。例：正用「恩に着せる」(547件) / 誤用「恩を着せる」(706件)。128組中11組がこのタイプに分類された。
- 活用法：正用と同じ述語が誤用でも用いられているが、述語の活用部分や態などが変化していたり、肯定・否定が反転しているなどするもの。例：正用「住めば都」(4777件) / 誤用「住まば都」(23件)。128組中15組がこのタイプに分類された。

2.3 誤りの性質による分類

2.2節で分類した4つのグループごとに、各事例の誤り部分を調べ、その性質の違いによる分類を行なった。

2.3.1 名詞型に対する誤りの分類

名詞型64組の正用と誤用の相違個所に見られる誤りの性質を次のように分類する。ただし、各分類は排他的でなく重複して分類される場合もある。

- 発音が類似しているもの：正用と誤用で異なる単語の音が類似している場合、ここに分類する。今回は、3名の被験者により音の類似性を判断し、2名以上が似ていると判断したものとした。例：正用「引導を渡す」(1984件) / 誤用「印籠を渡す」(100件)。64組中17組がこの誤りに分類された。
- 意味が類似しているもの：正用と誤用で異なる単語が、同義語とあって良い関係にある場合、意味が類似しているとして、ここに分類する。例：正用「面の皮が厚い」(588) / 誤用「顔の皮が厚い」(40)。64組中16組がこの誤りに分類された。
- 語の雰囲気似ているもの：正用と誤用で異なる単語の漢字の一部が同じであったり、部分的に音が類似するなどし、辞書的な関連がないものの、何となく雰囲気似ていたり、関連性が連想可能な場合に、ここに分類する。例：正用「薄紙をはぐように」(132) / 誤用「薄皮をはぐように」(270)。64組中44組がこの誤りに分類された。

- 共起すべき語が間違っているもの：誤用の名詞と文法的に共起する(係り受け関係にある)語が、意味的に適切でない語である場合、ここに分類する。多くの場合、雰囲気似ているものや意味が類似しているものと重複する。例：正用「枝もたわわに」(754) / 誤用「実もたわわに」(93)²。64組中16組がこの誤りに分類された。

2.3.2 述語型に対する誤りの分類

述語型38組の正用と誤用の相違個所に見られる誤りの性質を次のように分類する。ただし、各分類は排他的でなく重複して分類される場合もある。

- 発音が類似しているもの：名詞型の場合と同じく、正用と誤用で異なる単語の音が類似している場合、ここに分類する。例：正用「人道に悖(もと)る」(477) / 誤用「人道に劣(おと)る」(16)。38組中5組がこの誤りに分類された。
- 意味が類似しているもの：正用と誤用で述語をほぼ同じ意味で用いていると判断できる場合、ここに分類する。例：正用「体調を崩す」(10170) / 誤用「体調を壊す」(1175)。38組中11組がこの誤りに分類された。
- 語の雰囲気が似ているもの：正用と誤用で、辞書的な関連ははっきりとしないものの、何となく雰囲気似や意味が似ていたり、意味的に関連しないが連想可能な場合に、ここに分類する。例：正用「脚光を浴びる」(13460) / 誤用「脚光を集める」(326)。38組中16組がこの誤りに分類された。
- 共起すべき語が間違っているもの：誤用の述語と文法的に共起する(係り受け関係にある)語が、意味的に適切でない語である場合、ここに分類する。例：正用「合いの手を入れる」(1575) / 誤用「合いの手を打つ」(130)。38組中21組がこの誤りに分類された。

2.3.3 助詞型に対する誤りの分類

助詞型11組に見られる誤りを次のように分類する。

- 単一の助詞を誤ったもの：1つの名詞に対する助詞を間違えたため意味が通じなくなった場合にこの誤りに分類する。例：正用「手に負えない」(15000) / 誤用「手が負えない」(241)。11組中6組がこの誤りに分類された。
- 複数の助詞を入れ違えたもの：複数の助詞を間違え、述語に対する格関係が正用とまったく異なる場合にこの誤りに分類する。例：正用「百聞は一見に如かず」(18506) / 誤用「一見は百聞に如かず」(439)。11組中5組がこの誤りに分類された。

² 「たわわ」は、(枝が)「たわむ」様子である。実はたわまない。

2.3.4 活用型に対する誤りの分類

活用型 15 組に見られる誤りを次のように分類する。

- 述語の活用を誤ったもの：活用が間違っている場合にここに分類する。例：正用「伏し目がち」(2257) / 誤用「伏せ目がち」(4395)。15 組中 8 組がこの誤りに分類された。今回の事例では、活用の形として許されないものが 5 組、文語の間違いが 2 組、連体形と連用形の間違いが 1 組あった。
- 肯定・否定が逆転したもの：例：正用「うだつが上がらない」(973) / 誤用「うだつが上がる」(162)。15 組中 3 組がこの誤りに分類された。
- ら抜き言葉になっているもの：例：正用「生きられる」(28400) / 誤用「生きれる」(3650)。15 組中 3 組がこの誤りに分類された。なお、現在では「ら抜き言葉」は誤用とは言い切れなくなっている。
- 態が変わっているもの：例：正用「蟹鑿(ひんしゆく)を買う」(4292) / 誤用「蟹鑿を買われる」(13)。15 組中 1 組がこの誤りに分類された。

3 誤りの原因に関する考察

前節で分類した誤りの個所と性質の分布をまとめたものを表 1 に示す。表 1 では、名詞型と述語型の誤りの性質には重複があるため、事例数よりも合計が多い。名詞型および述語型の誤りの性質の詳細を表 2 に示す。

表 1: 誤りの個所と性質の分布

誤りの性質	名詞型	述語型	助詞型	活用型
事例数	64	38	11	15
発音の類似	17	5	-	-
意味の類似	16	11	-	-
雰囲気の種類	44	16	-	-
共起語の誤り	16	21	-	-
単一の助詞誤り	-	-	6	-
複数の助詞誤り	-	-	5	-
活用誤り	-	-	-	8
肯定・否定誤り	-	-	-	3
ら抜き言葉	-	-	-	3
態の変化	-	-	-	1
合計(延べ)	93	53	11	15

以降は、今回収集した事例の中で数の多かった名詞型 64 組および述語型 38 組の合計 102 組に絞り考察を行なう。

表 2: 名詞型と述語型の誤りの性質の詳細

	発音	意味	雰囲気	共起	合計
	名, 述	名, 述	名, 述	名, 述	名, 述
発音	4, 1	4, 1	9, 0	0, 3	17, 5
意味	4, 1	10, 7	0, 0	1, 3	15, 11
雰囲気	9, 0	0, 0	21, 8	15, 8	45, 16
共起	0, 3	1, 3	15, 8	0, 7	16, 21

3.1 発音の類似について

発音が類似していると判断された 22 組(名詞型 17 組, 述語型 5 組)の音素列を調べたところ、すべての事例において、違いは 1 音節(1 文字)以内であり、内 19 組は、1 音節内の子音か母音のどちらか一方だけが異なるものであった。内訳を表 3 に示す³。

表 3: 発音の類似における音の相違点

子音(正:誤)	母音(正:誤)	名詞	述語
-:k, -:g, z:~, -:r	i	5	0
n:m	e	1	0
s:n, h:t	a	0	2
m:~, m:b, b:h, r:d	o	3	1
-	e:ē, i:e	1	1
b	a:u, o:a	2	0
s	i:u	2	0
t	a:e	0	1
ti が足りない, ri が余分		2	0
kaisai と kassai(促音)		1	0

対比のため、発音が類似すると判断されなかった他の慣用的表現の中で、音素列の相違が 1 音節以内であるものを調べたところ 13 組あった。そのうち、1 音節の中の子音か母音の一方だけが異なるものは 1 組で、残りは母音、子音とも異なっていた。この点から、誤用の原因が「発音の類似」と結びつけられるのは、せいぜい 1 音節の中で母音か子音 1 つだけが異なる場合であり、それ以外は他の要因を考える方が妥当であるといえる。なお、母音の i が関係するものが 11 組と最も多かった。

また、発音の類似のみのものは 5 組だけであり、大部分は音だけでなく他の要因も重なっている。そのため、発音が類似した語があるとそれがすぐに誤用されるというよりも、正用の語との間に、音に加えて何らかの意味的な関係や雰囲氣的な類似を持つ語が存在する場合、誤用される可能性が高い。

3.2 意味の類似について

意味の類似に関しては、他の要因との関連が見られないものが 17 組で全体の半分以上あった。また、共起

³ 使用する音素は [5] を参考にアルファベットで表記した。

語の誤りととの重複が1組しかない。つまり、慣用的表現としては正確でないので誤用ではあるが、慣用的表現から離れた文自体の意味としては、それほど違和感のない事例が多い。例：「顔の皮が厚い」（正用「面」）や「歯をむく」（「牙」）などは、ニュアンスが変わるものの理解できなくもない。このタイプの誤りは、慣用的表現の全体的な意味は比較的正確に記憶しているが、個別の語については曖昧であるため、意味がほぼ同じで正用とは異なる語を選択することにより起こると考えられる。

3.3 雰囲気類似について

雰囲気類似に関しては、他の要因との関連が見られないものが29組で全体の半分ほどあった。この場合は「中らずといえども遠からず」といった誤用が比較的多い。例：「池の中の蛙」（正用は「井」）は、池を狭い場所と考えれば理解できなくもない。「思いも付かない事態」（「寄らない」）は「思いが浮かぶ」か「思いが及ぶ」かの違いに目をつぶれば理解できなくもない。

一方で、共起語の誤りと重複するものも23組と比較的多い。この場合は、慣用的表現から離れた文自体の意味として考えても、違和感のある事例ということになる。この点については次の3.4でまとめて考察する。

3.4 共起語の誤りについて

共起語の誤りは、係り受け関係や格関係にある名詞と述語の意味的關係が適切でない場合が該当するので、そもそも意味の通じない文を作成していることになる。これは、一般的な文章では、通常、書き手が犯しにくい誤りであると考えられるが、慣用的表現においては、102組中37組と4割近く発生している。このような誤用は、そもそも慣用的表現を普段から使い慣れていないことに遠因があると思われるが、直接的な原因としては、次の推測ができる。

- 「単語」を意識せずに、慣用的表現内の部分文字列と共起させてしまう。例：「合の手」で1単語とすべきところを「手」だけと共起させた結果「合の手を打つ」（正用は「入れる」）と誤用する。
- 語の意味、由来を理解せずに、慣用的表現内の部分文字列と共起させてしまう。例：「火蓋」は、火縄銃の火薬と火縄の間にある安全装置のようなフタで、開くことにより機能するので、落ちるものではないが、「蓋」に共起した結果「火蓋を落とす」（正用は「切る」）と誤用する。「先鞭」は、人より先に（馬に鞭打って）物事に手をつけることであり、既に鞭打っているのだが、「鞭」だけに共起した結果「先鞭を打つ」（「つける」）と誤用する。
- 似たような行動、事象を連想させる雰囲気類似の似た語を選択してしまう。例：「コーヒーをたてる」（正

用は「入れる」）は「茶をたてる」から、「将棋を打つ」（「指す」）は「碁を打つ」からの連想だと推測される。「目をひそめる」（「眉」）は動作を思い浮かべ描写する際に、眉でなく目を選択してしまったものと考えられる。

3.5 考察のまとめ

以上、誤用につながる書き手の行動や誤用の持つ特徴として、次のようにまとめられる。

- 音が類似すると感じられる誤用の目安は、せいぜい1子音が1母音の相違までである。
- 音が類似し、意味が同じか、何らかの関連が感じられる語を誤用しやすい。
- 「単語」の本来の意味や、由来を理解せず、印象だけで共起する語を用いる誤用をしやすい。
- 「単語」の切り出しを誤って、正確でない部分文字列と共起する語を用いる誤用をしやすい。
- 正確さを重視せず、曖昧な記憶に基づいた印象で語を適当に用いる誤用をしやすい。

4 おわりに

本稿では、慣用的表現の誤用について調査を行った。慣用的表現は辞書等で調べることができるので、本来、表記誤りによる誤用はせずすむはずである。それにも関わらず、現実には誤用が相当数存在する。こうした誤りは書き手の不注意ではあるが、人間らしい誤りであるとも言える。

人間の誤りを補う能力は、今後の言語処理にとって重要な技術の1つである。慣用的表現の誤りは、「明らかな正解のある誤り」であるので、頑健なシステムに向けた最初の題材として好ましい。また、誤用を正しく理解して正用に結びつけるには、少なくとも本稿で述べたような誤用の原因を考慮した推論が不可欠であり、技術的にも挑戦するだけの価値や難しさがある。

謝辞

本研究の一部は、科学研究費補助金萌芽研究（課題番号 1565002）の援助を受けた。

参考文献

- [1] Google. Google web apis (beta), web document. <http://www.google.com/apis/index.html>, 2004.
- [2] 国広哲弥. 日本語誤用・慣用小辞典. 講談社, 1991.
- [3] 国広哲弥. 日本語誤用・慣用小辞典「続」. 講談社, 1995.
- [4] 柴田武. 人前で使える日本語. 祥伝社, 2004.
- [5] 小泉保. 改訂 音声学入門. 大学書林, 2003.
- [6] 北原保雄 編. 問題な日本語. 大修館書店, 2004.